

●高澤良一 第十二句集 暮津

●四月―六月

食う菊もありてよきもの一株植う

蝶の舞書体で云へば草書体

写生の眼花と画帖を往き来して

大石の昼行燈にさくらは似

鯉に伍し亀の泳げる仏生会

住職は頑固なお人紫荊

花見むと来しりハビりに気散じに

酔どれのそれそれと散る花を

花奪ふ風に尻尾のあるごとし

朝桜禽搔い潜り搔い潜り

日曜画家絵筆に含ます花のいろ

夜ざくらを口あめぐりと開けみる児

夜桜の雪洞高くここ低く

たんたんと咲く夜ざくりに飛行音

花の下ベルのよく鳴る三輪車

十日程花遅れたり建長寺

諸葛菜巡らせ建長寺 回春院ニぜの起居かな

ここ最も奥まる塔頭濃山吹

下駄履きの作務僧春筍抱えくる

洪鐘おおがねに飛花の当たりてはたと落つ

椿落ち載り損ねたる石畳

茹であげてこれっぱかりのほうれん草

エナメルの靴先に飛花舞ひ込める

沿線の花に急かされゆくごとし

先づこんなところ櫂の芽吹きとは

郁李や早め早めとなる起居

とびつきり遠くへとべる飛花一つ

花見衆持ち込む小ぶりの瓦斯ボンベ

花見客に唸る屋台のバッテリー―

夜ざくらに酔ふて地に置く紙コップ  
靴脱げる処が玄関花筵  
走り根の出っ張り避けて花筵  
石組の石を押すなり花筏  
鎮守府横須賀海軍鎮守府の苔むす桜何見て来し  
いちにち雨心に烟る花を観て  
燈台の足下からすのゑんどう咲く  
飛花舞はす風の一変フォルテッシモ  
苗木売る市立つ即ち散財す  
植木市立つや神社を間借りして  
立読みの春の園芸雑誌かな  
空耳に盈ち盈つ花のせりふかな  
日は闌けに闌けて悶々八重櫻  
湘子逝く馬酔木も花の鉦打ちて  
春愁レントゲン写真ふ吾が骨格を医師と見て  
病人に個室大部屋春闌けぬ  
八重櫻足懈く道戻りけり  
夕風に揉まるる桜ここから帰路  
ぶるぶると俵形してしゃぼん玉  
突き出せる子の掌に大破しゃぼん玉  
妻うっかり五月さばえ蠅を入れて仕舞ひけり  
植木市薔薇前にして施肥講釈  
曲がる術知らぬ五月さばえ蠅の飛び来たり  
芍薬の蕾弾けば固し固し  
茎立や素なる生活たつきにいつか慣れ  
春疾風それに倍する花吹雪  
盛りの牡丹危惧する程の雨でなし  
御首みしるしを風に撲たれしチューリップ  
風絶えぬ一日牡丹の獅子奮迅  
桜薬降らせて雨の粗くなる  
徒然なるままにけふ過ぐ翁草

妻伴れて若葉曇りをウォーキング  
馬鈴薯を植え了へはたく手がかさかさ  
毛虫ひそかに事運びしが発覚す  
発覚即リンチと毛虫心得よ  
六十余年あつといふ間や種痘痕  
種袋裏に記しある発芽率  
みみず棲むことが上出来腐葉土と  
腐葉土作り大学構内落葉もて  
蔦若葉吹く風クラブ10カラット  
伊勢佐木町ブルース単衣のソックリさん  
おととつと森の小径の垂れ毛虫  
山道の一層冥く宝鐸草  
椎匂ふ日中友好会館裏  
鉢退けられあらはづかしのなめくじり  
パンパスの旗指物を雨急襲  
五月十七日義母 新城千代逝去  
青葉青臭しまさかの脳出血  
茄子苗植う穴掘りかけて逝かれけり  
雪の下平屋に棲みて平屋に死す  
話続け夏めく茶の間に汝が口調  
青嵐まだ吹き足らぬまゝ通夜へ  
柿の花ひとり男が遺されし  
大往生と云ひて云はれて青葉の夜  
山梔子や後悔といふ後手踏んで  
汝が植えし松葉牡丹も喪に服す  
喪の家の厨の玉葱発芽して  
骨壺と新樹の中を戻りけり  
朝顔の双葉本葉と喪の日過ぐ  
夜は明けて茄子炯々と納骨日  
雀啼く平屋の家の明易し  
はつなつの花を絶やさじ新仏  
喪の家の明易ければ鳥のこゑ

骨壺の一つ置きある夏座敷  
会津出の汝を弔ふに会津の冷酒ひゃ  
気安さの千代さん無き家明易し  
ひやひやと夜の手が触れて眠草  
厨より話に加はる五月妻  
うなづいて答へるときの瞳の涼し  
喉佛大のころころ枇杷の種  
枇杷の種落とせば木の音したりけり  
認知症病みて熟れ枇杷滴らす  
枇杷滴るこんな筈ではなき母に  
虫共の鼻も曲らむゼラニウム  
恥部を見る顔付きをして蚯蚓見る  
軟体の蜥蜴は水のごと流れ  
総領の甚六にして蝸牛  
なめくぢの所業リンチに値せむ  
いつまでもこどもはこども瓜の花  
双葉もて百の朝顔翔びさうな  
なめくぢは極刑草鞋虫は放免  
墓直木三十五の墓のうへ瘦せ古柿の柿若葉  
窓開けゐて吾も若葉の湿りもつ  
くろもじ若葉雨降ってよし晴れてよし  
新築の家成りレ\*カナムエチの一種ッドロビン垣  
代蛙一雨あつてもよささうな  
浅蜷椀押さえつ地震の止むを待つ  
茶ぼこりのかすかにあがる新茶淹れ  
シンプルがベスト皐月の装身具  
六月の植木鋏をばちばちん  
日雷母が正気に戻るとき  
眠草なんなら君も触れてみな  
眠草突つく処がなくなりぬ  
液肥与ふペチュニア・サファイニア・ロベリアと

古漬胡瓜茶漬けの候となりにけり  
一物のごとく胡瓜のぶるさがり  
へエと云ひ葉下の胡瓜覗きゐる  
これと決む朝顔苗のポリポット  
あぢさゐがのさばり出して家の裏  
バルコニー「マサイの矢尻」鉢に活け  
更衣首にほくろのある女  
茅花茅花と茅花の戦ぐやうに云ふ  
合歡の花咲いてベティの長睫毛  
だん孫美雨ご虫愛づる姫君梅雨の庭  
姉妹交互に手出しねむり草  
梅花卯木ほとほと雨の止まざるよ  
高齢のもう起きて掃く夏落葉  
莫迦をみる初生り西瓜承知で買ふ  
吾が一つ覚えの臺灣バナナ買ふ  
納豆の風味のアボガド出回り夏  
どう見てもこれ育ち過ぎアカンサス  
つきあひにも距離といふものジャスミン茶  
消息のその後ぷつつり花ぎぼし  
隔たるものどどん隔たり冷奴  
生り方も見てのとほりのミニトマト  
銭葵元警官の家にして  
卯の花腐し思案ああでもかうでもなし  
剣崎当りが適當磯あそび  
冷奴へたに動かぬほうがい  
吾が棲みし借家健在柿の花  
布袋草表紙に掲ぐ一俳誌  
青蔦や叙事詩展開せるごとく  
蔦嵬悼勝亦年男に青龍一頭放たれぬ  
熟れ枇杷や敢へて云ふなら人缺月  
竹落葉拾へり痴呆軽度の母

若竹のそっちは剪りて是残す  
九州は梅雨入と聞くアマリリス  
降る雨の真っ直ぐ葵に倣ふべく  
紫陽花や死に支度にも手本あり  
雨烟り繡線菊ぼんやり咲くところ  
孫預かる故の散財夏祭  
根っからの音痴に生まれグラジオラス  
助産婦の家の和蘭あやめかな  
聖域を犯すごと百合剪りにけり  
ほたるぶくろ悼みは時を経て薄らぐ  
男滝へは女の足で十四、五分  
徒に十葉引けば梅雨近む  
どくだみや皆何處か病み葉漬け  
この家で命全うしたき虹  
生かされて生くる御教え未草  
葉ざくらや日の斑を顔に胸肩に  
蜻蛉飛ぶ定期航路のある如く  
蜻蛉つるむ音のかさこそかさと墮つ  
植木鉢取り退けなめくじ狩りにけり  
夏の蝶 8 の字翔びに興じけり  
団扇絵の逆巻く濤の風受けて  
市立ちて一鉢なんぼの鬼灯売る  
青山椒隈取り深く毛虫の貌  
絵葉書に貝のイラスト夏見舞  
あぢさゐの地味に応じて醸す彩  
朝顔の掴まる処用意せり  
石畳かつんと打ちて夏落葉  
柿の花妻懐古の実家に近く棲み  
梅擬この粒花があんな実に  
緑さす料理一品一品に  
了見を一通り聞き葛桜

岩牡蠣と云へば象潟合歓咲くころ  
ヨモギスジハモグリバエの跡か是れ  
傷跡のこんもり夏至の胸板に  
老人のでれつと涼む湯屋板間  
螢の出問ひ合はせれば昨夜五頭  
剥き甲斐あるそら豆にしてこれっぽち  
剥き売りのそら豆に鯖雨後の街  
はんぺんを着に父の日の晩酌  
飛び込むは蛙ガガブタ覆ふ沼  
風上にノハナシヨウブを愛づるこゑ  
ノハナシヨウブ一町先の風が見ゆ  
太藺見て吾もゆらゆら揺れゐたり  
行々子もぐり込んだる葭っ原  
繡線菊にぼんやり道の続きをり  
英名は洒落めて夕菅デイ・リリー  
未草そこ離れむとして眩暈  
オニシモツケじんはりけふは蒸す日なり  
団体客箱根空木の紅を愛で  
しゃかしゃかと仙石原の夏の虫  
風露草雨すれすれに落ち来たる  
蚊とんぼのぶらさがりをる谷地柳  
駒草や岩場岩場の岩の彩  
ポッチャンと跳ねしは梅雨の稚魚でした  
海を見て扇子パチパチやってをり  
気のせいか箱根空木に雨ぽつり  
梅雨の湯舟に銀座カンカン娘の唄  
往時の逗子サマータイムといふがあり  
匙よりもずんと大きな苺であり  
くろもじの宿す雨滴を南風払ふ  
雨癖のこれからつくよ著莪の空  
ペチュニアは雨にからきし駄目な花

小肥りな躰を伸ばしなめくじり  
ずぶ濡れに雨のペチュニヤぺったんこ  
ぶん投げられ糶らる鯉のメタリツク